慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記に代えて : 市川統洋君を憶う
Sub Title	
Author	内山, 正熊(Uchiyama, Masakuma)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.9 (1980. 9) ,p.266- 267
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	市川統洋助教授追悼論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800915-0266

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記に代えて

——市川統洋君を憶う——

内山正熊

学究者として油が乗り切る四十四歳という男盛りに、市川統洋君はこの世から姿を消した。学者として教育者として、これからいよいよ本領を発揮するというそのとき、君はわれわれ法学部の期待をよそに、卒然と逝つてしまつた。政治学科若手の中堅を法学部が失つたわれわれの痛惜は、まことに大きかつた。何ゆえに君はこんなに早くこの世を去つたのであろうか。天意は、はかり難い。

法学研究会は、従来定年退職後の名誉教授などには追悼記念論文集を編むのをつねとしていたが、君のような現役の若い同僚のために追悼論文集をつくることなどは考えてもみないことであつた。しかし、市川君のような前途洋々たる逸材を失つて強烈な愛惜の念に駆られたわれわれの中に、君を追悼する記念論文集をという声が期せずしておこり、こゝに親友川合隆男教授の肝入りで、社会学関係を中心とする研究者が法学部内外を問わずこぞつて協力することになつて、本論文集は生れたのである。法学研究編集委員会は、君が昇天してまさに一年にならんとするときに間に合わせて、本論文集に研究論文を執筆された諸学兄の御厚意に深謝の意を表したいと思う。在天の君は、何よりもこの学問的プレゼントを喜ばれていることであろう。

君が、法学部専任として在職したのは、僅か六年半にすぎなかつたけれども、君は学究のプロフェッショナルとして、学界に、わが法学部に、とりわけ「法学研究」に十二分の貢献をされた。その序列においてこそ、助教授というステータスであつたにしても、君は実質的には立派に大学教授としての職責を果したといえる。法学研究会にとつても、君のような頼りになる戦力を失つた打撃は大きい。コーネル大学訪問研究員としての不在期間を除いた五年余りに君が「法学研究」に寄せた論稿は六点に及び、その中の一つは、Keio Journal of Politics, Vol. I, No. 1 創刊号を飾る英語論文であつた。君はまた法学部講師になる前、すでにアメリカのミネソタ州セント・メアリー大学社会学部の助教授となり、帰国後も貿易研修センターの助教授となるなど多彩なキャリアをもつたのである。事実、君には学問上の業績、学者としての風格、貫禄において、正教授を優に凌駕するものがあつた。著作こそは、年限の関係で一冊の書物も残されなかつたにせよ、一九七七年には、ギデンスの大著「先進社会の階級構造」を訳出している。その名訳はすでに三版を重ねていることからも、君の名は、それによつて後世まで銘記されることであろう。専門外の私も、この翻訳だけは通読したが、現代の資本主義社会及び社会主義社会を分析する上で階級理論の有用性を明らかにした名著であると思われる。この翻訳に当つては、君はゼミナールで何回も何回も、学生と討議検討したといわれるが、それは適確な名訳であり、その表現に漢字一つを使うのにも苦心された跡が見える労作である。

君の人生行路は、平坦な学者の歩むコースと異なつて、銀行員生活と訣別して再び学究生活に入り、在米実に六年にも及んだが、それは単なる留学だけでなく、外国大学で教職につくという貴重な経験をもつたのである。君はこのユニークなキャリアをおくびにも出すことなく、法学部の一員として摯々として謙遜に研究教育活動に専念していた。しかし君は、白面の学究者らしからぬ見るからにエネルギッシュな容貌で、法学部同僚から信頼敬愛されていた。教室においてのみならず、ゼミの学生を家に招くなどして熱心に教育指導に当つたのであるから、君が学生を魅了したのは想像に難くない。その在職期間は短かかつたに拘らず、君は逞ましい線の太い存在だつたので、私には政治学科の同僚として何十年もの長いつき合いのような気がしてならない。一緒に飲みながら話すという仲でなかつたが、信仰を同じくするせいか、あのロイド眼鏡の底に光る人なつこい眼が会うと、お互に相寄つて歩きながらも話しがはずんだ。全く君に接していると、何となく信頼の念が湧いて来て、頼母しいという感じがして来たものである。私など年上ではあつても、君と話していると、誰か先輩にでも接しているような気がして来たのを思い出す。学問的には全く無縁であつたのに、君は私に高山右近の伝記を貸してくれと頼んで来たり、先年塾に重大事件が起つたときには、思いがけず私に所信をきいて来たりした。君にはやはり私と共鳴するところがあつたのではあるまいか。君は何よりも真実と正義と良心を大事にしていたと思うのである。

君は三十を過ぎてからカトリックに入信した。理性的にひたむきな学究には、信仰は邪魔と見なされがちなのに、君は学問と信仰とを二本建てにしないで、立派にあわせもつことが出来た。それは、すばらしいことであつた。信仰は君の生活の支えであつた。君の温かいまなざしは、その心の中からあふれ出る人間愛のあらわれであつた。君が本当に学生を愛し親身になつて相談に応じ指導したのを私はよく知つている。君は学生のもつよいものをひき出し、彼等を励まし自信をもたせたのであつた。

君はまた熱があり信念の人であつた反面、実に謙虚な人となりでもあつた。名訳「先進社会の階級構造」の「訳者あとがき」に、君は、「私ごとき浅学非才の輩が本書のような重要な書物を訳出したことにたいし、一種の罪悪感を覚えざるをえない。訳者として最低限の義務を正しく果たすことができたようにと、願うばかりである。あり得るであろう誤りや拙訳にたいする責任は、全て私のものである」と最後に記している。あの最後の大業をなし遂げた後で、君は自ら誇ることなく自責の念すら抱いていたのである。私は市川君をしみじみえらいと思う。君は、この世では心残りであつた学究の道を、いま天国で心ゆくまで歩んでいることであろう。

法学研究会は、ここに在りし日の君を偲び、「法学研究」に向けられた数々の寄与に対して心からの感謝を捧げる次第である。

（一九八〇・七・二三）